

江戸時代末期の寺子屋と学制発布に伴う小学校開設との関連に関する一考察

— 埼玉県加須市の実態調査 —

Relationship Between Terakoya in the Late Edo Period and Establishment of Elementary Schools Caused by the Promulgation of the Educational System Order — A Survey in Kazo City —

平 井 厚 志
(こども学科 教授)

要旨 本研究は、江戸時代後期から学制期までの、加須市内における寺子屋と小学校開設の関連を明らかにすることを目的として行った。文献調査、聞き取り調査、石碑や絵馬の実地調査で加須市内には約 60 の寺子屋が存在していたことがわかった。学制発布で 40 の小学校が誕生した際、32 校は寺院を借用しての開設であった。また 9 小学校は以前に寺子屋があったところに開校された。教員は寺子屋の師匠だった者や旧藩士が多く、僧侶は少なかった。寺子屋師匠から教員を経て校長になった例も見られ、当時の教員養成システムを見ることができた。本調査研究から寺子屋と小学校は極めて密接な関係があったことが示唆された。

【キーワード：加須市 寺子屋 師匠 小学校 絵馬】

I. はじめに

1. 調査地区「加須市」について

加須市は、都心から 50km 圏内の埼玉県東北部に位置し群馬県、栃木県及び茨城県に接している。市域を利根川が流れ、川が運んだ土砂の堆積により形成された平坦地である。市の中心部は、都市機能が集積する市街地となっており、周囲は農業地帯で肥沃な田園となっている。

平成 22 年（2010）3 月 23 日、平成の市町村大合併に伴い、旧加須市、旧大利根町、旧北川辺町、旧騎西町の一市三町が合併し、現在の「加須市」が誕生し現在に至っている。

1) 旧加須市

江戸時代は幕府直轄地や旗本の知行地、関東所在の各藩の領地になっており、幕末期には 40 の村々があった。その後明治 4 年（1871）4 月の戸籍法制定に伴う区の制定や戸長・副戸長が県から任命されるに至り、行政事務の体系が整えられ、村落は旧来の自治的性格から県行政の末端機関の性格を持つようになった。その後幾多の合併が行われ、明治 22 年（1889）の市町村制施行により加須町と 8 村が誕生し、昭和 29 年（1954）5 月 3 日にはそのうち 2 町 6 村が合併し、加須市が誕生した。その後、昭和 32 年（1957）1 月 1 日に

大越村が加須市と合併した。

2) 旧大利根町

江戸時代当初は全町域が天領であった。その後旗本知行地も多くなった。産業は農業である。村数は 20 に分かれていた。村の規模は 199 軒を超える村から、12 軒という小さな村もあった。

3) 旧北川辺町

江戸時代は茨城県の古河藩に属していた。明治以降埼玉県に属したが、渡良瀬川の河川改修にともない、昭和 5 年（1930）に茨城県猿島郡新郷村大字伊賀袋・立崎が川辺村に編入。さらに昭和 30 年（1955）に利島村と川辺村の 2 村が合併して北川辺村となり、旧町域となった。町境界域は群馬県や栃木県、茨城県で他県との結びつきも強い。

4) 旧騎西町

江戸時代は川越藩領と他の大名、旗本の支配地であった。明治維新の際は複雑な支配体制だったため 25 の町村が存在した。

2. 研究目的

来る令和 4 年（2022）は、我が国の近代教育がスタートした明治 5 年（1872）から数えて 150 年を迎える。江戸時代の教育は藩校や私塾、寺子屋で行われたが、庶民の初等教育を担ったのは圧

倒的に寺子屋が多い。加須市にも多くの寺子屋が存在したと推測されるが、明治以来の各資料には調査漏れも多く、近年の旧市町が刊行した市史や町史等で補完されてはあるが、その全体像は完全とは言い難く、現在の加須市全体をまとめたものはない。また寺子屋同様に、学制発布に基づき各村々に開校された小学校も、開校に至る経緯や初期の教員の姿等も明確でないことが多い。

今回、江戸時代末期（天保元年 1831 年から明治維新まで）の加須市内の寺子屋と明治 5 年（1872）の学制発布を機に開校された小学校の関連を明らかにし、設置施設や教員の成り立ちを明らかにすることを研究目的とした。

3. 研究方法

本研究は各市町史や学校沿革史等の文献調査、学校関係者や学制発布当時の教員の子孫等からの聞き取り調査、及び実地調査を基に行った。

主な視点として、寺子屋に関しては幕末期の寺子屋の数、筆塚及び絵馬の設置の様子について、小学校に関しては明治 5 年（1872）8 月の学制発布から「学制」を廃止して「教育令」を公布した明治 12 年（1879）9 月までの 7 年間の間に開校した小学校の開校年、開校場所（施設）、初期の教員、教育内容を中心に調査を進めた。

II. 調査結果

1. 加須市における寺子屋

1) 寺子屋に関する全国的な調査

我が国における、寺子屋に関する本格的な調査は、明治 16 年（1883）2 月 5 日に文部省が発出した、文部省達第一号「教育沿革史編纂二付学制沿革取調差出」により、各府県に藩校や私塾寺子屋についての資料収集を命じたのが最初である。寺子屋に関する調査項目¹⁾は下記のとおりである。

- | | |
|---------|----------|
| ・名称 | ・学科 |
| ・所在地 | ・開設と廃業 |
| ・教師、生徒数 | ・塾主氏名、身分 |

各府県からの調査報告を受けた文部省は、明治 23 年（1890）7 月 21 日から順次、調査内容を「日本教育史資料」として出版をした。寺子屋については、「日本教育史資料八」²⁾に東京府や大阪府、神奈川県等 23 府県の資料が、「日本教育史資料九」³⁾に福井県等 17 県が記載されている。埼玉

県については理由はわからないが記載されておらず、この調査に関しての埼玉県の状態は確認できない。

次いで大規模な調査を行ったのは、東京高等師範学校、東京文理科大学教授であった乙竹岩造である。乙竹は大正元年（1912）から昭和 3 年（1928）年にかけて公務の傍ら調査研究を行い、昭和 4 年（1929）9 月、「日本庶民教育史全 3 巻」を刊行した。調査の手法は大正 4 年（1915）から大正 6 年（1917）にかけて、乙竹の友人や知人が寺子屋の師匠や寺子で学んだ古老を訪問し、聞き取りを行うというものであった。また全国の師範学校の最高学年生徒も、長期休業中に帰郷した際、同様に古老から聞き取り調査を行った。この結果、全国の師匠やその助手、寺子だった者 3,090 人からの証言を得ることができた。埼玉県については「日本庶民教育史 中巻」⁴⁾に 79 名（男 59 名、女 20 名）の古老の報告がなされている。また、本書における埼玉県の寺子屋数を 79 としている。

加須市に関連する内容として志多見村の古老の報告に、教材として「村の高札に掲げられたる全文を読み聴かされた」、礼羽村の古老の報告に「師匠である香積寺の僧侶平野宏宗は寺子や父兄から尊信を受け、一家の不和を和らげたり、村の不調を調するなど皆から信望を得て地頭のごとき地位を有していた」との 2 例の報告があるのみである。

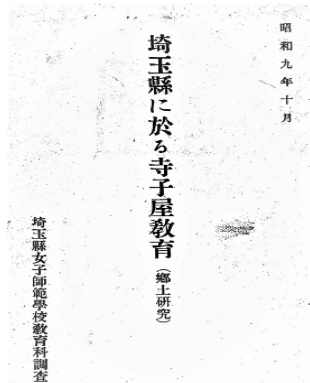
2) 埼玉県に関する調査

ア 埼玉県女子師範学校による調査

埼玉県に関する調査は、埼玉県女子師範学校が行った昭和 9 年（1934）夏の調査が始まりである。

調査は生徒が夏季休業中に帰省した際に、古老を訪ねるという、前述の乙竹の手法を用いている。調査の趣旨は、乙竹が言うように埼玉県の調査が少ないという点であり、調査の目的を、刊行された「埼玉縣に於る寺子屋教育」⁵⁾に「此の企の目的とするところは當時本縣一般に行はれたる庶民教育の状況を探り、今やその記憶より消え行かんとする本邦古風の教育事情を現存の故（古）老に尋ねてありし日の面影を明にし、以て本縣々民性に対する理解の一助たらしめんとするものであり・・・」と記している。調査項目は寺子屋の名

称や師匠の氏名から授業内容・遊戯の内容、在学中や卒業後の師匠と子どもの関係等、多岐にわたるものであった。



同書によると、この調査における有効回答数は66の寺子屋である報告している。この66の寺子屋を見ると、師匠の氏名が明確なのは64名、不明なもの3名である。64名中2名が同一の寺子屋の師匠であると推測される。また、寺子屋の名称が明らかなものは29であり、約半数は明らかなでない。その理由を「埼玉県教育史第1巻」⁶⁾では普通一般の寺子屋の場合、特別に名称をつける理由がなかった。「お師匠さん家」とか「お師匠さんの墓」という言葉で寺子屋師匠を呼び、形式的な名称をつけなかったからだと述べている。

加須市の状況は表1に示すとおりである。

表1 加須市の寺子屋

所在地	師匠の氏名	寺子屋名称
不動岡町	大木柳民	不明
礼羽村	榎本左平	不明
大越村	岡 東浴	不明
志多見村	輕子六郎	龍生学校

この調査における加須市の寺子屋数は4と少ないが、女子師範学校の生徒の帰省先の偏りが原因と考えられる。

イ 埼玉県教育会による調査

昭和16年(1941)埼玉県教育会は県下の国民学校長や男女両師範学校生徒を増員して、全県的に寺子屋師匠の調査を行った。この調査で、当時316市町村中、172市町村の報告を得た⁷⁾とある。この時の調査結果は、県内を9地区に分けて、埼玉県立文書館に保管されている。この資料中、加須市が属していた北埼玉郡を見ると15町村31

の寺子屋が調査用紙に記載されている。旧加須市を見ると下谷村・加須町・不動岡村・大桑村・礼羽村・馬内村の記録があるが、重複があったり、明治20年(1887)に開塾のものもある。それらを除いて調査結果をまとめると、表2のとおりとなる。

表2より7塾が確認されるが、旧大利根町や旧騎西町の報告はなかった。

埼玉県女子師範学校の調査と比べると、不動岡村の大木柳民(頭里)は同一であり、礼羽村は金蓮寺かとも推測されるが、大越村及び志多見村は消えてしまい、新たに下谷村、馬内村、南大桑村2か所が追加になっている。

現時点で9か所の寺子屋が確認された。

表2 加須市の寺子屋 昭和18年調査

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧加須市	不動岡村	大木塾	大木頭里	農民
		寺澤塾	寺澤政常	不明
	下谷村	不明	儘田栄蔵	農民
	礼羽村	金蓮寺		
	馬内村	香積寺	小野田某	農民
	南大桑村	大福寺	伊藤貞雄	僧侶
			伊藤頼雄	僧侶
			伊藤密雄	僧侶
		円光寺	佐久間徹玄	僧侶

(埼玉県立文書館資料から作成)

ウ 埼玉県教育委員会による調査

埼玉県教育会の調査から24年後の昭和40年(1965)3月から昭和42年(1967)8月にかけて、埼玉県教育委員会は県下の市町村教育委員会を通して、寺子屋関係の文書資料や墓碑、石碑などによる調査を行い、その結果を「埼玉県教育史第1巻」⁸⁾にて公表した。

この調査によって、寺子屋数が828、師匠の人数は1,120人が確認されが、資料の亡失を勘案すると県内には1,000以上の寺子屋があったのではないかと述べている。幕末期の加須市内の寺子屋についてみると、旧加須市が8、旧大利根町が5、旧北川辺町が5、旧騎西町が0で合計18の寺子屋を確認できる。それぞれの所在地や師匠の名前は表3から表5に示すとおりである。寺子屋の数は、埼玉県女子師範学校調査時の4、埼玉教育会調査時の7に比べ、今回は18と大きくその数を増した。この時点での加須市の寺子屋の数は、

教育会調査時の実数7に今回の調査で新たに発見された旧加須市6, 旧大利根町5, 旧北川辺町5を足して23に至った。全体を通してはっきりした寺子屋の名称は半数程度で、師匠も僧侶や修験、農民、医者と多様である。当時の調査では、まだまだ明らかにされていない寺子屋も多く、掘り起しはその後の市史や町史作成の調査に委ねられた。

表3 旧加須市の寺子屋

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧加須市	加須町	不明	寺沢政常	不明
	不動岡村	(大木塾)	大木頭里	農民
	下谷村	自宅	儘田栄蔵	農民
	馬内村	香積寺	平野宏宗	僧侶
			小野田某	農民
	南大桑村	大福寺	伊藤貞雄	僧侶
			伊藤頼雄	僧侶
			伊藤密雄	僧侶
	花崎村	不明	本間篤信	医者
旧加須市	串作村	北の寺子屋	小花盤一郎	農民
	上三俣村	寛華堂	菊地義慎	農民

表4 旧大利根町の寺子屋

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧大利根町	道目村	不明	竜蔵	不明
	弥兵衛村	南光院	石川英信	修験
	砂原村	不明	黒川源左衛門	不明
	下新井村	不明	鳥海小平次	農民
	間口村	不明	田村四郎左衛門	農民

表5 旧北川辺町の寺子屋

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧北川辺町	麦倉村	南光院	石川英信	修験
			石川一	修験
	飯積村	不明	平井才助	村吏
		不明	野中伝次郎	修験
	伊賀袋村	不明	江田四郎左衛門	村吏
旧加須市	柳生村	養性寺	橋本来仙	僧侶

エ 各市町村による調査

ア) 旧加須市内の調査

加須市では、昭和54年(1979)5月から12月にかけて、市内の金石文の調査を行った。その結果、797基の資料と211の書き写した銘文が「加須市の金石文」にまとめられた。同書には記念碑や墓碑、顕彰碑等が収録されており、その中にはいわゆる筆子塚⁹⁾も収録されている。しかし、そこから師匠名はわかっても、具体的な寺子屋の名前や所在地を知ることはできない。797の一覧

から、前述した埼玉県女子師範学校や埼玉県教育委員会の調査で明らかになった「不動岡町の大木柳眠」¹⁰⁾についての記載がある。内容は大木は寛政9年(1798)10月に生まれ、明治4年(1871)2月亡くなった。不動岡に家塾を開き、書及び剣を教え400人の生徒がいた。門人が明治3年(1870)6月にこれを建立した。読み書きそろばんを指導する寺子屋の師匠とはイメージが異なるが、顕彰を目的としているので、このような文になったと思われる。金石文から明らかに幕末期から明治初年に、子どもを対象とした寺子屋を抜き出したものは、表6に示すとおりである。

表6 旧加須市の寺子屋 金石文から追加分

	所在地	建立寺院等	師匠氏名	種類
旧加須市	加須町	(光明寺)	林孝平	筆子塚
	大越村	(大乘寺)	不明	寺子屋の碑
	常泉村	民家	福島志可	生祠
	水深村	真蔵院	西村庸蔵	顕彰碑
	下高柳村	民家	田村方雄(恭齊)	顕彰碑

しかし、これらの寺子屋は、同書の4か月後に発刊された「加須市史 通史編」¹¹⁾には収録されず、市内の寺子屋一覧として、「埼玉県教育史」より作成したものを掲載している。ただし、埼玉県教育委員会調査時は記載されなかった、川口村と下三俣村、多門寺村の寺子屋を追記しているが根拠は明確でない。加須市史通史編における増加分は表7に示すとおりである。

表7 旧加須市の寺子屋 市史追加分

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧加須市	川口村	不明	堀江氏	武士
	下三俣村	自宅	堀越弥市右衛門	農民
	多門寺村	不明	寺沢又三郎	不明
			鈴木多京	
旧加須市	多門寺村	不明	本田篤信	不明
			本田篤信	

加須市史編さん室は、通史刊行から3年後に、通史に収録できなかった人々の経歴や業績をできるだけ収録しようと、昭和59年(1984)3月に総数292名を載せた「加須市史 別編 人物誌」を刊行した。この人物誌において、新たに寺子屋関係6名が判明した。表8に示すとおりである。

表8 旧加須市の寺子屋 市史 人物誌追加分

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧加須市	加須村	童集舎（自宅）	鈴木在夢	修験者
	不動岡村	不明	塚田伝左衛門	農民
	上三俣村	寛花堂	寺沢又三郎	不明
	礼羽村	不明	有山玄白	医師
	川口村	不明	堀江正信	武士
	船越村	不明	関根忠兵衛	不明

イ) 旧大利根町内の調査

大利根町は平成5年（1993）から町史編さん事業を開始し、刊行計画を次のように定めた。平成12年度「大利根町のあゆみ（町史普及版）」、平成14年度「大利根町史 資料編 下巻」、平成15年度「大利根町史 通史編」。そして予定どおり刊行された。寺子屋についてみると、「大利根町のあゆみ（町史普及版）」¹²⁾に、「道目村では千手院や薬師堂、弥兵衛村では西福寺、北大桑村では宝蔵寺、砂原村では黒川源左衛門が自宅で、場所が不明だが下新井村では大塚元貞及び鳥海小平太が、琴寄村では本間篤信が、間口村では田村四郎左衛門、生出村では籠宮権之丞が教えていた。」とある。昭和40年（1965）から昭和42年（1967）の埼玉県教育委員会の調査では、道目村・弥兵衛村・砂原村・下新井村・間口村のみであったので、北大桑村や琴寄村・生出村の寺子屋が新たに発見されたことになる。

これに先立ち、大利根町教育委員会は大利根町郷土史クラブに町内の石碑の調査を依頼し、その結果を平成6年（1994）3月「大利根町の石碑」¹³⁾として刊行した。顕彰碑、功德碑、筆子塚等から明らかに寺子屋関連とわかるのは5基であった。

石碑は、内容や建立年月、建立者等を明らかにしたが、下記の写真は北下新井の瀧蔵院にある鳥海小平太の筆子塚である。筆子塚は寺子屋存在の証しになるので、一例としてここに取り上げる。鳥海小平太は長寿先生と慕われ明治5年（1872）に逝去し、明治14年（1881）に筆子らによって建立されたものである。



正面に「長寿先生碑」、台座に「中子筆」（右横書き）としっかり彫られており、典型的な筆子塚を見ることができる。この石碑の調査は、「大利根町史 資料編 下巻」や「大利根町史 通史編」につながっていくが、資料編では寺子屋に関する資料は1篇だけであり、明治5年（1872）に常陸国真壁郡築地村（現筑西市築地）西光寺次男 五乗が書き上げた「筆子名前並びに手習内容書上」が取り上げられている。それによると寺子屋の場所は「故医王寺廃跡薬師堂借転」とあり、廃寺になった医王寺の薬師堂を使用している。また明治4年（1871）正月から明治5年（1872）年8月までの間に入門した男子35名、女子2名について、一人ひとりの氏名と年齢、教授内容を記しており、当時の寺子屋の教授内容がわかり興味深い。最終的に大利根町は、「大利根町史 通史編」¹⁴⁾において、7村9寺子屋を収録している。昭和43年（1968）県教育委員会の調査から増加分は表9に示すとおりである。

表9 旧大利根町の寺子屋 追加分

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧大利根町	北大桑村	宝蔵寺		
	道目村	薬師堂	五乗	僧侶
		千手院		
	下新井村	不明	大塚元貞	医師
	琴寄村	不明	本間篤信	農民
	生出村	不明	籠宮権之丞	不明

ウ) 旧北川辺町内の調査

北川辺町史編さん委員会は、多年にわたって収集した教育資料をまとめ、「北川辺の教育(1)」¹⁵⁾を刊行した。同書には寺子屋・塾として16例を挙げているが、江戸時代後期から明治時代初頭以外のものを除外すると7である。昭和43年(1968)時の調査は5例収録されているので、今回増加したのは2か所で、表10に示すとおりである。

表10 旧北川辺町の寺子屋 町史追加分

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分
旧北川辺町	栄村	萬松寺	大豊廣川	僧侶
	向古河村	真光寺	不明	僧侶

向古河村の真光寺については、鷲神社に奉納されている絵馬により、当時の様子を知ることができる。剥落があり鮮明ではないが、右端に観音像が安置され、その横に師匠(僧侶)が座して、子どもたちを見ている。中央手前はまじめに墨をすっている子、中央左手は両手を上げあくびをしている子、右下の水瓶のそばで誰かとやり取りしている子など、にぎやかな手習の様子がみられる。



(向古河 鷲神社奉納絵馬)

また師匠のほかに、手習の助手をしている婦人や、縁側に座している婦人なども描かれており、当時の寺子屋の様子を見ることができる。

エ) 旧騎西町内の調査

騎西町は昭和56年(1981)から町史編さん事業に着手し、順次、資料編等を刊行してきたが、集大成として平成17年(2005)に「騎西町史 通史編」を刊行した。

表11 旧騎西町の寺子屋 騎西町史

	所在地	名称又は寺院名 建立寺院等	師匠氏名	身分
旧騎西町	戸崎村	宝光寺	明道・来寂	僧侶
	戸崎村	竜宝寺	19世	僧侶
	上高柳村	地藏堂	遙道	僧侶
	中種足村	東印寺	12世	僧侶
	中種足村	桃林堂 竜昌寺	市川斎斎	不明
	中種足村	小川桃林堂 泉蔵院	小川某	不明
	日出安村	寺沢又三郎 保寧寺	寺沢又三郎	不明
	日出安村	駒形神社 祠	不明	不明
	上高柳村	諏訪神社 祠	不明	不明
	戸崎村	八坂社 菅公碑	不明	不明
	上崎村	愛宕神社菅公碑	不明	不明
	戸室村	民家 祠	不明	不明
	鴻巣村	寿昌寺 祠	不明	不明

同書中¹⁶⁾、寺子屋と私塾について「筆子に関わる住職供養塔11基」、「筆子に関わる天満宮12基」「筆子に関わるその他の石碑7基」の30基を収録している。その中で、文政11年(1828)から明治初期までの40年間で、明らかに庶民教育を行ったであろうと思われる寺子屋をまとめると表11に示すとおりである。江戸時代後期(明治維新の40年前から維新まで)から明治初期まで、騎西町には13程度の寺子屋が存在していたことがわかる。

オ) 加須市全体の寺子屋

それぞれの調査で判明した加須市全体の寺子屋(所在地がわからず師匠氏名のみ判明も含む)は表12に示すとおりである。1つの寺子屋に2名の師匠が存在したか否か、寺子屋と師匠をダブルカウントしているか等、寺子屋の数をカウントするのは困難な面があるが、乙竹氏や県教育会、県教育委員会等の各調査、明治初期の行政文書、筆子塚、顕彰碑、墓誌等を総合的に勘案すると、加須市内には概ね60程度の寺子屋があったと推測される。

表 1 2 加須市の寺子屋

	所在地	名称又は寺院名	師匠氏名	身分 石碑等
旧加須市	大越村	(大乗寺)	不明	寺子屋の碑
		不明	岡 東裕	不明
	加須村	(光明寺)	林孝平	筆子塚
		童集舎	鈴木在夢	修験者
	上三俣村	寛華堂	菊地義慎	農民
		不明	寺沢政常	不明
	川口村	不明	堀江正信	武士
	串作村	北の寺子屋	小花盤一郎	農民
	志多見村	不明	輕子六郎	龍生学校
	下谷村	不明	儘田栄蔵	農民
	下高柳村	民家	田村方雄(恭斎)	顕彰碑
	上三俣村	寛花堂	寺沢又三郎	不明
	下三俣村	不明	堀越弥市右衛門	農民
		不明	寺沢又三郎	不明
	多門寺村	不明	鈴木多京	不明
		不明	本田篤信	不明
	常泉村	民家	福島志可	生祠
	花崎村	不明	本間篤信	医者
		大木塾	大木頭里	農民
	不動岡村	寺澤塾	寺澤政常	不明
		不明	塚田伝左衛門	農民
	船越村	不明	関根忠兵衛	不明
	水深村	(慶雲寺)	西村庸蔵	顕彰碑
	南大桑村	大福寺	伊藤貞雄	僧侶
			伊藤頼雄	僧侶
			伊藤密雄	僧侶
	馬内村	香積寺	佐久間徹玄	僧侶
			平野宏宗	僧侶
	馬内村		小野田某	農民
	礼羽村	不明	有山玄白	医師
		不明	榎本佐平	不明
		金蓮寺	不明	不明
旧大利根町	生出村	不明	籠宮権之丞	不明
	北大桑村	宝蔵寺	不明	不明
	琴寄村	不明	本間篤信	農民
	下新井村	不明	鳥海小平次	農民
		不明	大塚元貞	医師
	砂原村	不明	黒川源左衛門	不明
		不明	竜蔵	不明
	道目村	薬師堂	五乗	僧侶
		千手院	不明	不明
	間口村	不明	田村四郎左衛門	農民
旧北川辺町	弥兵衛村	南光院	石川英信	修験
	飯積村	不明	平井才助	村吏
		不明	野中伝次郎	修験
	伊賀袋村	不明	江田四郎左衛門	村吏
	栄村	萬松寺	大豊廣川	僧侶
	向古河村	真光寺	不明	僧侶
	麦倉村	南光院	石川英信	修験
			石川一	修験
旧騎西町	柳生村	養性寺	橋本来仙	僧侶
	鴻菱村	不明	不明	寿昌寺 祠
	上崎村	不明	不明	愛宕神社 曹公碑
	上高柳村	地蔵堂	遙道	僧侶
	上高柳村	不明	不明	諏訪神社 祠
	戸崎村	竜宝寺	19世	僧侶
		不明	不明	八坂社 曹公碑
	戸室村	宝光寺	明道・来寂	僧侶
		不明	不明	民家 祠
	中種足村	東印寺	12世	僧侶
		桃林堂	市川齊斎	竜昌寺
	日出安村	小川桃林堂	小川某	泉蔵院
		不明	寺沢又三郎	保寧寺
		不明	不明	駒形神社 祠

3) 絵馬で見る寺子屋

これまで江戸時代末期から明治時代初期までの寺子屋の設置状況を古文書や主に金石文(石碑)により見てきた。筆子塚と同様に、寺子屋存在の証しとして、学問上達の願いやその願いが成就された際に奉納されるものに絵馬がある。市内には寺子屋と関連する絵馬が幾つか存在する。現在確認されているものは、旧加須市大越の徳性寺に1点、旧大利根町北大桑香取神社に1点、旧北川辺町向古河鷲神社に4点、旧騎西町戸崎の竜宝寺に12点である。北川辺の絵馬は北川辺町の寺子屋調査で前述したとおりである。ここでは、加須市大越の徳性寺の絵馬を見ていく。



(加須市大越 徳性寺絵馬)

この絵馬は、左に「奉納薬師如来」の幡を建てた本堂を描き、画面右に大きく寺子屋の様子を描いている。大きさは120 cm×175 cm、画中の文字より文久4年(1864)に「溪斎 北尾重光」が制作したことがわかる。画面右奥に師匠である住職を描き、そのほか、若いお坊さん1人、小坊

主1人、師匠の手伝いの大人1人、筆子16人を描いている。筆子の中に髪形や帯から推測して5名の女子が確認できる。徳性寺26世梅沢清真住職に解説をしていただいたところ、寺子屋に関する資料は現存していないが、絵馬の構図から推測すると寺子屋の場所は、現在の山門の右手で旧公民館があった場所ではないかという。また筆子に女子が多いのは、当時の大越地区は利根川水運の河岸があり、人口も多く大変賑わっており、経済的に裕福な家も多かったため、女子を寺子屋に通わせることができたのではないかという。絵馬の左下に奉納者の名前が記されているが、今でも大越地区に存在する家々であり、必ずしも徳性寺の檀家ではない。絵具は特殊な顔料を使用しており、特にブルーは暗いところで光を当てるとその色が浮かび上がるなど貴重な話を伺った。師匠がどういう方かは、寺が世襲制でないためわからないとのことであった。

次に、北大桑香取神社の絵馬は、寛政13年（1801）に奉納された絵馬で江戸末期ではないが、図柄が鷹狩りの鷹で非常に珍しい。願主が「寺子屋中」となっているため明らかに寺子屋関係の絵馬と判断される。



（加須市北大桑 北大桑香取神社の絵馬）

神主や世話人の子孫の皆さんに、奉納のいわれを訪ねたがわからないとのことであった。通常、鷹の絵馬は安産祈願であり簡単な鷹の図柄が多いが、この鷹図には大緒（鷹の足革に結びつける大きな組糸の緒）が描かれており、当時の北大桑村は鷹場の鳥飼場だったことに関連するのではないと思われる。絵馬から師匠や寺子屋名は判断できないが、寺子屋の教育に関する奉納であったと判断する。以上簡単に絵馬について述べたが、加須市内の寺子屋関係の絵馬については、今後研究

を進めることとする。

2. 学制発布による小学校の開設

1) 学校開設時の施設

明治5年（1872）8月、我が国の最初の近代的学校制度を定めた教育法令である「学制」が発布された。109章からなり、「大中小学ノ事」「学校ノ事」「教員ノ事」「生徒及試業ノ事」「海外留学生規則ノ事」「学費ノ事」の6項目を規定した。この中で学校制度を実施するための機構として学区制を採用し、全国を8大学区にわけ、各大学区に大学校1校をおき、1大学区を32中学区にわけ、各中学区に中学校1校をおき、1中学区をさらに210小学区にわけ、各小学区に小学校1校を置くこととした。人口約600人に対して小学校1校を置くことを目標としたものであった。これを受け加須市内に小学校が開設された。学制発布から明治12年（1879）9月に教育令が交付され学制が廃止されるまでの間に、小学校が開設された年と開設された場所（施設）は表13に示すとおりである。

表13より、加須市には分校も含めて40の小学校が設立された。そのうち実に32校が寺院を校舎として開校している。

表13 学制期の小学校開設年と開設場所

	現学校名	学校名	開校年月日	開設施設（校舎）
旧加須市	加須	加須	明6. 3	光明寺
		久下	明8. 1. 4	新築
	不動岡	不動岡	明6. 3. 10	総願寺
		下谷	明6. 3. 25	生善院
	三保	多門寺	明6. 3. 15	民家
		三保	明7. 7. 5	観音寺
	礼羽	礼羽学校	明6. 6. 25	金蓮寺
	大桑	南大桑	明6. 10. 2	大福寺
		篠崎	明6. 4. 7.	普門寺
	水深	油井	明6. 3. 7	神宮寺
		水深	明6. 8. 1	新築
		割目	明8. 9. 1	桂性寺
		大室	明6. 4. 16	龍宮寺
	樋遣川	樋遣川	明6. 4. 15	寺院
		樋遣川西	明7. 7. 25	民家
		戸川	明7. 7. 15	民家

	志多見	志多見	明 8	長昌寺
		阿良川	明 8 . 9 . 1	常德寺
		立生（串作村）	明 6 . 2 . 1 5	観音寺
	大越	大越	明 6 . 4 . 8	徳性寺
旧 騎 西 町	騎 西	騎西	明 6 . 2	善応寺
		下崎	明 6 . 4	光徳寺
	田ヶ谷	田ヶ谷	明 9 . 1	宝性寺
		上崎	明 9 . 2	竜興寺
		道地	明 1 0 . 3	成就院
	種足	種足	明 8 . 8	民家
		戸室	明 6 . 2	金蔵院
		戸室分校	明 6 . 8	（中種足地区）
	鴻荃	鴻荃	明 8 .	寿昌寺
		芋荃	明 6 . 7	普門寺
		牛重	明 8 . 5	万福寺
	高柳	高柳	明 6 . 8	地藏院
	旧 北 川 辺 町	西	麦倉	明 6 . 5 . 1 5
東		小野袋	明 6 . 5 . 1 0	来福寺
		栄	明 6 . 5 . 1 5	正福院
旧 大 利 根 町	東	中新井	明 6 . 5 . 1 5	星福寺
	元和	琴寄	明 6 . 6	長泉寺
	原道	道目	明 6 . 5	千手院
	原道	永保	明 6 . 5	西福寺
	豊野	阿佐間	明 6 . 4 . 2 0	金乗院

(埼玉県教育史第1巻・各市町史から作成)

加須市立大越小学校の様子を学校沿革史¹⁷⁾で見
てみる。

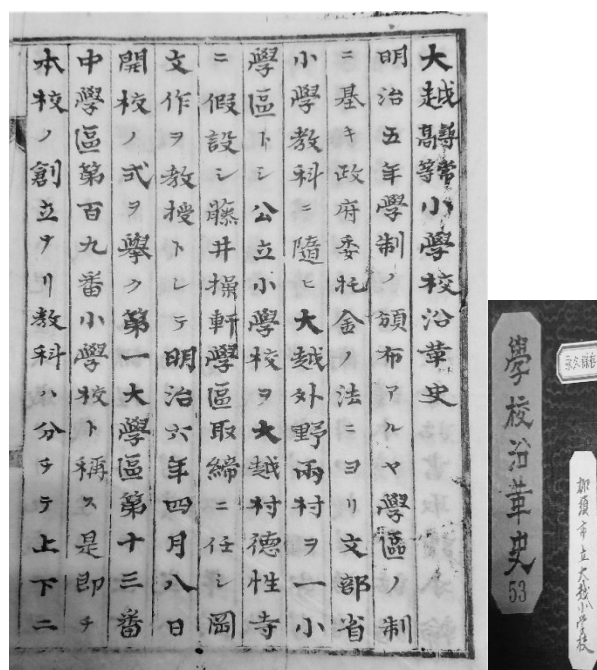
文中の中ほどに、大越村徳性寺に仮設し、明治6年4月8日開校の式を挙く……ある。この徳性寺は前述した寺子屋の絵馬が奉納されている寺である。学制発布を機に各村は小学校を設立する運びとなったが、建設費用や敷地獲得に多くのお金がかかることや、多くの小学生が一同に会するには広い敷地と施設を有する寺院が最適であることから、寺院を借用したものと推測する。

2) 学校開設時の教員

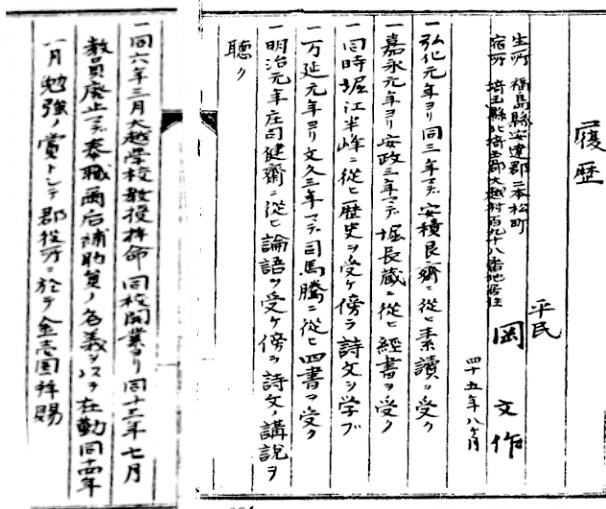
学制において、「小学教員ハ男女ヲ論セス年齢二十歳以上ニシテ師範学校卒業免状或ハ中学免状ヲ得シモノニ非レハ其任ニ当ルコトヲ許サス」¹⁸⁾と規定しているが、東京の師範学校の第1回卒業生が明治6年(1873)7月であるように、教員養成が追い付かず、士族や僧侶、寺子屋の師匠等、漢学の教養を有する者を教員にあてた。各学校における教員の氏名及び学校施設に寺子屋あったかどうかは表14に示すとおりである。寺院の所在地に32の学校が誕生した。教員は士族や寺子屋の師匠の名を確認できる。大越小学校学校沿革史に出てくる「岡文作」についてみる。埼玉県立文書館所蔵の本人の履歴書によると、素読・経書・歴史・詩文・四書・論語を収め、明治6年3月大越小学校の教授を拝命したことがわかる。岡文作は、埼玉県女子師範学校が寺子屋について調査した資料に「大越村・岡東浴」と記されている人物である。

表14 学校開設時の教員及び寺子屋の有無

	現学校名	学校名	校舍	教員	寺子屋
旧加須市	加須	加須	光明寺		○
		久下	新築		
	不動岡	不動岡	総願寺	長坂竜右衛門（本県士族）・塚田伝左衛門・明石省三（群馬士族）・渡辺弥兵衛・茂木林・牧虎太郎（埼玉士族）・小幡真先・影山玉栄・伊藤豊之助	○
		下谷	生善院		
	三俣	多門寺	民家	宇野英次郎・網野長雄・越川皆之助	
		三俣学校	観音寺		
	札羽	札羽学校	金運寺	堀毅（茨城士族）	○
	大桑	南大桑学校	大福寺	堀江正信（本県士族）・福田万蔵・中里半兵衛・伊藤密雄（師匠）	○
		篠崎	普門寺		
	水深	油井	神宮寺	田村米三郎（師匠）	
		水深	新築	西村庸蔵（関信藩士・師匠）	
		割目	桂性寺		
		大室	龍宮寺		
	樋遣川	樋遣川	寺院		
		樋遣川西	民家		
		戸川	民家		
	志多見	志多見	長昌寺	鈴木徹（古賀藩士）	
阿良川		常徳寺	福田林蔵		
立生（串作村）		観音寺	村越源太郎		
大越	大越小学校	徳性寺	岡文作（師匠）	○	

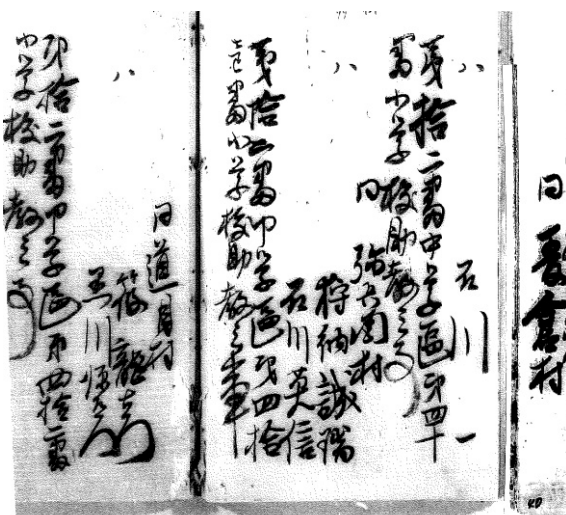


旧騎西町	騎西	善応寺		
	下崎	光徳寺		
	田ヶ谷	宝性寺		
	上崎	竜興寺		
	道地	成就院		○
	種足	民家		
	戸室	金蔵院		
	戸室分校	(中種足地区)		
	鴻基	寿昌寺		
	芋基	普門寺		
旧北川辺町	高柳	牛重	万福寺	
	高柳	地藏院		○
	西	麦倉	石川一宅	石川一(師匠)
	東	小野袋	来福寺	小松精一
	東	栄	正福院	蓮見連太郎
	東	中新井	星福寺	
	元和	琴寄	長泉寺	本間林蔵(師匠)
	原道	道目	千手院	篠龍斎・黒川源左衛門(師匠)
	原道	永保	西福寺	加納誠瑞・石川英信(師匠)
	豊野	阿佐間	金乗院	



(埼玉県立文書館所蔵)

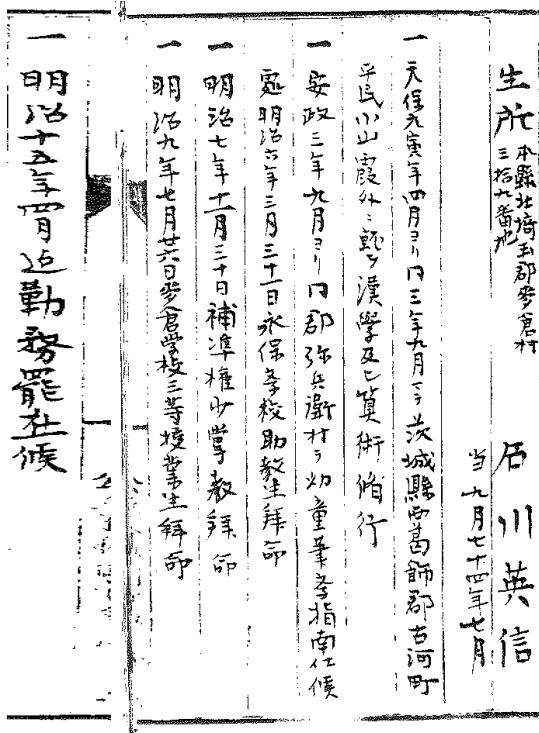
また、麦倉村「石川一」、弥兵村「加納誠瑞・石川英信」、道目村「篠龍右衛門・黒川源右衛門」が各小学校の「助教」に任ぜられたことがわかる。これは明治6年3月28日の発令である。



(埼玉県立文書館所蔵)

埼玉県立文書館資料中の弥兵衛村「石川英信」と麦倉村「石川一」は親子である。石川英信の5代子孫である石川亨氏にお話を伺ったところ、石川氏の祖は源平合戦のころから源氏に属し、1480年代に北川辺麦倉の領主として3万2千石を領した。その後、永禄年間(1560年代)の関東騒乱時に戦に敗れ栃木県にのがれたが、天正2年(1574)再び麦倉に戻り、修験者になり南学院を開山。途中南光院と改名した。江戸時代に南光院にて寺子屋を開設していた。学制発布に伴い、石川一は麦倉学校を自宅の南光院に開校し初代校長になったとのことである。石川一の父親の英信については、あまり伝承されていないとのことであった。石川一については、「北川辺の教育(1)」¹⁹⁾に寺子屋の師匠であったこと、西小学校の沿革として、「明治6年5月15日、石川一麦倉学校を創設す」「訓導兼校長石川一(明治6.5.15～22.4)」の記載がある。なお、埼玉県立文書館保管の行政文書中、石川一に関するものとして、準権少掌教から権少掌教への昇任や訓導補、校長兼訓導への昇任等、多数の記録が残っている。

父親である「石川英信」についてみると、英信は、北川辺町の利根川の対岸である弥兵衛村にある西福寺に寺子屋を開設し、子供を教えていた。学制に伴い、西福寺に永保学校を開設した際、教員となった。明治15年(1882)の本人の履歴書には、「安政三年九月ヨリ同弥兵衛村テ幼童筆文字指南仕候處明治六年三月三十一日永保学校助教生拝命」とある。寺子屋の師匠として、習字等を教えていたところから、引きつづいて小学校の教員に至った経緯が自筆で書かれてあり大変興味深い。寺子屋師匠の前は、古河町で漢学、算術を修行とあることから、当時の教養人、知識人として寺子屋師匠を務め、教員になったことがわかる。



(埼玉県立文書館資料)

道目村の道目小学校教員になった「黒川源左衛門」についてみると、江戸時代は道目村に隣接する砂原村の自宅で寺子屋を開設していた。学制に伴い、明治6年3月に道目学校に助教として採用されたのは前述のとおりである。「大利根町史 資料編下巻」²⁰⁾に碩学有志の者願書として、明治6年2月24日付の埼玉県改正局への入学願が記載されている。改正局は明治6年(1873)1月、埼玉県が県下の教員を養成するため開設した機関であり、同年4月から運用を開始して教員養成にあたり、修了状況により教員の名称や等級、給料等を決定した。改正局開設直後の応募であり、黒川の向学心の高さが感じられる。

次に士族だった者が教員になった例を見てみる。「加須市の金石文」²¹⁾に「西村庸蔵之碑」が記載されている。碑文中、「先生は旧関宿藩士におはせしが明治4年ころ水深村にうつろい給い子弟に教授せられ・・・6年9月水深小学校の開けし時教師になり給い・・・」とある。関宿藩士だったこと、明治4年以降塾を開いて子弟を教授していたこと、水深小学校開校に際し教員になったことがわかる。埼玉県保存の行政文書で確認をすると、明治6年(1873)6月、大室学校の助教に任命をされている。その後、明治9年(1876)水深学校に転任。準権少掌や訓導補、訓導に昇任して明治17

年(1884)水深学校の校長兼訓導に任用をされている。

北川辺麦倉学校の石川一同様、西村庸蔵も寺子屋(塾)の師匠から教員そして校長となっている。当時高い識見を持った最高の教養人であるとともに、村民からの信頼がとても厚かったことがわかる。このことは、明治28年(1895)1月に47歳で死去した後、翌年の1月に顕彰碑が建立されたことでもわかる。

Ⅲ. まとめ

今回の調査研究を通して、江戸時代末期から学制期までの約50年間に、市内には60程度の寺子屋が存在していたことがわかった。学制に基づき明治5年(1872)から小学校が開設されたが、加須市内では40の学校が開設された。そのうち32は寺院を借用している。また小学校を開設した寺院等中、10の施設は学制発布以前に寺子屋が開設されていた。

教員は一般的に寺子屋の師匠だった僧侶や神主、士族が多いと言われているが、加須市内では特に僧侶が多いということではなく、士族と寺子屋の師匠だった者が多い。ただし初期の教員が不明な学校も多いので、今後の調査研究で明らかにしていきたい。また、寺子屋の師匠や士族から教員になり、校長になった例も見られ、当時の学校が組織化されていくうえで興味深い。

もうすぐ学制150年を迎えるが、近代教育が誕生し発展して行く様子を本調査で見ると、寺子屋という地域との密着性、寺子屋師匠の力量、地域からの信頼などが大きく影響していたと思われる。今回の調査研究が現在進んでいる教育改革に少しでも反映できれば幸いである。今回解明できなかった部分の調査研究を進め、今後の教育活動に活かしていきたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、御指導・御助言を賜り、また貴重な資料を御貸与いただきました、加須市立大越小学校長武内知江様、徳性寺住職梅澤清真様、北川辺町石川透様、埼玉県立文書館様、埼玉県立図書館様をはじめ多くの皆様に厚くお礼を申し上げます。

引用文献・注釈

- 1) 文部省.「日本教育史資料 壹」. 1890, 7.
p 12-13
- 2) 文部省.「日本教育史資料 八」. 1892, 9.
p 155-737
- 3) 文部省.「日本教育史資料 九」. 1892, 9.
p 1-412
- 4) 乙竹岩造. 日本庶民教育史 中巻. 臨川書店,
1970, 9. p 832-853
- 5) 埼玉県女子師範学校.「埼玉縣に於る寺子屋教
育」. 1915, 7. p 1
- 6) 埼玉県教育委員会.「埼玉県教育史 第1
巻」. 1968, 3, 20. p 183
- 7) 木部良樹,「寺子屋について」, 埼玉史談第8
巻3号, 埼玉県郷土文化会. 1961, 8. p 27
- 8) 埼玉県教育委員会.「埼玉県教育史第1巻」.
1968, 3, 20. p 94-95
- 9) 加須市史編さん室.「加須市の金石文」.
1980, 10. p 29
- 10) 加須市史編さん室.「加須市の金石文」.
1980, 10. p 37-38
- 11) 加須市.「加須市史 通史編」.1981, 2, 16.
p 457-458
- 12) 大利根町.「大利根町のあゆみ」.2001, 3. p
46
- 13) 大利根町教育委員会.「大利根町の石碑」,
1994, 3. p 18-56
- 14) 大利根町.「大利根町史 通史編」.2003, 3. p
398-399
- 15) 北川辺町史編さん委員会.「北川辺の教育
(1)」. 1983, 3. p 6-10
- 16) 騎西町教育委員会.「騎西町史 通史編」.
2005, 3. p 563-569
- 17) 加須市立大越小学校.「学校沿革史」, 永久保
存資料. p 1
- 18) 文部省.「学制」, 1872, 7. P23, 国立国会図
書館デジタルコレクション
- 19) 北川辺町史編さん委員会.「北川辺の教育
(1)」. 1983, 3. p 6. p 11-16
- 20) 大利根町.「大利根町史 資料編下巻」.
2002, 3.31. p 232
- 21) 加須市史編さん室.「加須市の金石文」.
1980, 10. p 44